

平成 27 年 12 月

語り部：西原 正周

満州事変が起こったのが昭和 6 年、私はその前の年の昭和 5 年に産まれた。現在、戦後 70 年という月日が流れている。私が中学校 3 年生の時に戦争が終わった。今は、中学校 3 年生が終わると高校生になるが、当時中学校は 5 年制だった。私は学徒動員という形で戦争に協力をした。その時の体験・想いをお話しして、戦争の時はこういうものだったのだ、ということをお話して皆さんに知ってもらいたい。

(出征兵士の写真を見ながら)

小学校へ行くと毎日のように出征兵士の見送りをしていた。昭和 13 年の新聞に載っていた。皆が旗を持ち「頑張ってくい」と兵隊さんを送り出していた。当時兵隊になっていたのは若者だった。男性は 20 歳になると国民の義務として徴兵検査を受け、兵隊にみんな入隊していた。女性には義務はなかったが、時代が進み昭和 18 年頃になると、兵隊に負けないような訓練していた。本土で決戦になった時に敵を殺すために竹やりで訓練していた。私は鉄砲を担ぎ、隊列を組んでいた。各学校に兵隊の位でサーベルを持てる人が決まっていた。少尉・中尉・大尉・少佐・中佐・大佐・少将・中将・大将と階級が決まっていた。年下であっても身分の階級が上の人があると敬礼をしなければならなかった。昔からの知り合いであってもきちんとしなければならなかった。

そんな中で兵隊の訓練、教練をうけていた。中学生に入学した時、鉄砲を担いで兵隊の格好をし、鉄砲を分解して修理したりしていた。それが当たり前だった。予科練という言葉聞いたことがあるだろうか？私が中学校 2 年生の時から予科練に入隊できる資格があった。私の友人にも入隊した人がいた。

なぜそんな戦争を日本がしたのか。昭和 6 年満州事変が起こり、その後支那事変、そして太平洋戦争と続いていた。事変と戦争の違いは、戦争は天皇が詔勅を出したときに戦争と言い、詔勅が出ていなかったものを事変と言っていた。支那事変は、ある兵隊が 1 発の鉄砲を撃ったことが原因となった。そこから 20 年間続いた。

今日は 12 月 8 日、どんな日か知っているだろうか？真珠湾攻撃があった日である。私が小学校 5 年生の時だった。大本営発表により、アメリカイギリスと戦争状態に入ったとなった。最初のうちはどこへ行っても日本は勝っていた。ところが、だんだんと戦況が変わっていった。アメリカは国土も広く、たくさんの資源を持っていたが、日本には限りがあった。少しでも資源を手に入れようと領土を広げていっていた。これを侵略主義という。侵略しながら戦争をしていく、これを軍国主義と呼んでいた。

日本の政治をする上で一番偉い人は誰かわかるだろうか？総理大臣である。

戦争をしている頃一番偉かったのは誰かわかるだろうか？天皇である。現在天皇は日本国憲法の下、政治には関わらず国民の象徴としている。ところが、明治憲法は天皇が日本の憲法を執行し、軍隊を統率していた。天皇は戦地へ行くわけではなく、軍部が指揮をとっていた。軍部が国民を戦争へ向かわせた。父から、何のために勉強するのかを問われたことが有り、私なりに考えていたが、父は私に、勉強は自分自身のためにするといった。しかし、学校の先生からは、天皇陛下のために勉強をするものだと思われ、自分のためにするものだと思っていたために矛盾を感じていた。昭和16年、国民学校という制度が生まれた。先生からは、天皇のためにいつでも死ぬる人間になりなさいと教え込まれていた。

小学校から中学校に入学するときに試験があった。筆記試験では無く、口頭試験だった。ガダルカナル島がどこにあるのかという質問をうけた。昭和18年2月、日本はガダルカナル島から撤退した。それは負けたという意味だった。以来広い範囲で戦争をしていたが、昭和18年から負け戦が続いていた。昭和19年、サイパン島がついに陥落した。アメリカ軍はサイパン島に飛行場を築き、日本へ飛んで来て空襲を行うようになった。空襲は、工場地帯・大都市・中小都市にまで及んだ。

私は当時、学徒動員として新居浜にいた。男子学生は新居浜へ、女子学生は今治に行っていた。学徒動員中、履物は下駄しかなかった。今だと、すぐに買い替えたりできるが、当時とはとにかく物がなかった。新居浜にある住友化学に動員されていった。別子銅山を知っているだろうか？そこでは銅が出る。その銅を市内の工場に運び、つぶして砂のようにした生絨を溶鉱炉の中に入れてと亜硫酸ガスがでる。その亜硫酸ガスと水を混ぜて硫酸を作っていた。硫酸を利用して肥料を作ったり、いろいろなものを作っていた。その硫酸を作る工場にいた。どんなに色の黒い人でも、硫酸によりみんな白くなっていた。一緒に働いていた人の中には、オーストラリア人かオランダ人の捕虜がいた。作業をしていると、お腹がすき、寮でもらったお弁当を食べていたが、それでもお腹がすいていた。私達は田舎出身だったため、お米を持って来ていた。缶の中にお米を研いでお水と入れ、水蒸気で蒸したりしてご飯を炊いていた。食べた後流しで洗い、残った米粒が流しにあると、捕虜はそれをつまんで食べていた。捕虜も同じように苦しさを味わっていた。その時、戦争の悲惨さを子ども心に感じたりしていた。食糧不足のため、かっけという病気にかかったり、パラチブスという病気にもなり、住友病院に入院したりもしていた。

空襲で寮に爆弾が落とされたこともあった。時限爆弾を含む5発ほど寮に落とされた。食堂が焼かれ、一時寮を移設した。一般の工員さんがおり、爆弾でやられて、頭がい骨が切られている人もいた。昭和20年5月のことであった。だんだんと戦況も厳しくなっていた。お国のためと、任務を果たすために働いた。

新居浜にいた時の7月24日、B29が一機飛んで来て、黒い爆弾を落としていった。金属のキーンという高い音を鳴らしながらやってきた。逃げる暇は無かった。防空壕に入る時間も無かったので、急いで畑のくぼみに伏せて難を逃れようとしていた。その爆弾はパンプキン爆弾と言う。そのパンプキン爆弾は、長崎に落とされた原爆の模擬爆弾だった。朝7時45分だった。広場で隊列を組んでいた時に爆撃があった。その爆弾は上空8000メートルから金属製の音を鳴らしながら落ち、地上に落ちる手前で爆発した。私達は落ちたところから250メートルほど離れたところにおり、民家や障害物もあったが、破片が飛んで来て友人2人が負傷した。1人は足をやられ、ふくらはぎの肉がそがれて骨が見えていた。もう一人は肩甲骨に破片が刺さっていた。その人は50歳頃まで生きていたが、破片は体に突き刺さったままだった。幸い死者はでなかったが負傷者はたくさんいた。

病気にかかっていたため、家で療養するよう言われ、新居浜から松山に帰って来た。

松山駅に着いて周りを見渡すと、何も無くなっていた。松山も7月26日に空襲を受けたと後で知った。焼き尽くされ、鉄筋だけが残っていた。済美高校の校舎だけが残っていた。市駅の方を見ると、立花橋が見えた。その間何も建物が無く、焼け野原になっていた。後から聞いた話によると、松山空襲では、最初古町に焼夷弾が落ちて来て、そこから城山を中心に時計回りに焼かれていった。251名の方が亡くなったと言われている。

空襲では、30本から40本の束になった焼夷弾が落ちて来て、途中から火を噴いて落ちてきた。30本～40本の1発で、250㎡を全焼させると言われていた。中に油が入っており、日本の家は木でできているため次々と燃えていった。空襲では、宇和島、松山、今治、新居浜が焼かれた。戦争は本当に多くの日本人が犠牲になった。広島で原爆を受けて亡くなったのは14万人。長崎では8万人。日本において戦争で亡くなったのは310万人の人が犠牲になったと言われている。四国の中で高知県を除く他三県の人口を合わせて310万人程度、その人たちが亡くなった。生きていれば未来のある若者が亡くなった。

日本の軍隊は天皇を利用して戦争を起こし、終結のためにも天皇が玉音放送を流した。放送を受け、天皇を護衛するこのえ部隊が反乱したりもしていた。レコードを奪い取り、戦争を継続しようとしたが、天皇の放送が流れ、戦争が終わった。

私達は何を目標に生きていけばいいのか困った。今までは戦争に勝つことを目標に生きてきた。目標のない人生ほど辛いものは無かった。次第に世の中が落ち着き、平和な日本が生まれたのだと思った。平和を大切に自分たちの人生を生きなければならないと思った。

それまで、日本が負けるとは思ったことも無かった。厳しい状況の中で戦争に参加させられていた。戦争中一切の情報が無かった。天皇の声を聴いた途端、みんなで声をあげて泣いた。家で、正午にラジオ放送があると案内があった。「耐えがたきを耐え、偲びがたきを偲び」と聞き、最初は意味が解らなかった。家族から意味を聞き、ほっとした反面、悔しい、負けたと涙を流した。

楽しかった思い出はほとんどない。同じ釜の飯を食った仲間と当時を思い出しながら話すのが今の楽しみだ。戦争を起こさないためにどうすればいいか、皆さんあらためて考えてもらえればと思う。

質疑・応答

Q 戦争をした場所は？

A 私は学徒動員という形で戦争に参加させられた。バラック校舎で勉強をした。惨めな生活だった。

Q 一番つらかったことは？

A 食料がなかったこと

Q 新居浜でポンプキン爆弾はどこに落ちたのか？

A 田んぼに落ちた。落ちた後は、くぼみができ池になっていた。被害は無かったが、家が倒れたりしていた。

Q 捕虜はどんな人だったか？

A オランダの捕虜だったと言われている。お弁当にご飯を下げてきていた。よっぽどお腹がすいていた。

Q 戦争の時のご飯の量は？

A 朝ご飯を食べ、昼は弁当を下げていくが、重力で3分の1になる程しか入っていなかった。

Q 戦後松山はどのくらいで復興したのか？

A 最初はトタン板で雨をしのいでいた。他の人と協力しながら足りないものを分け合ったりしていた。

Q 松山空襲の時に家はどうなっていた？

A 松前町に家があったため被害はうけなかった。

Q 小学校の雰囲気はどうだったか？

A 小学校6年生の時に受験をした。クラスの3分の1程度しか中学校・女学校へ進学できなかった。辛い思いをしていた。

Q 軍の人の食べ物は？

A お酒やチョコレートなどもあったそうだ。

Q 戦争が始まった時は？

A 1歳の時にはじまったため、記憶が無い。

Q 今と比べて食事はどうだったか？

A おいしくなかった。お腹がすいたのを満たすことに必死だった。芋のツルやいなごを食べていた。

Q 戦争中配給されていたものは？

A お米は最初の頃は3合配給されていたが、その後2合3勺、2合1勺と減って行った。

Q 真珠湾攻撃の時どう思った？

A 大本営が発表され「やった！」と思った。

Q 戦前・戦中・戦後の変化は？

A 昭和5年頃はみんなぼろぼろの服を着たりしていた。人々が自由をはき違えていた。

Q 暮らしの苦勞は？

A 食べ物が無いことだった。交換したかったが交換するものすらなかった。雑炊を水筒に入れて持って来たりもしていた。

Q 原爆が落ちたのは見えた？

A ピカッと光ったのは見えた。翌日先生から新型爆弾が落ちたと聞いた。

Q 一番おいしかったものは？

A かんころもちという、芋をたばねて干したものが甘みがあって美味しかった。

Q 戦争中は戦争の事をどう思っていた？

A 勝たねばならないと思っていた。そのためにどうあるべきかを考えたりし、みんなが1つの方向をむいていた。戦争は正しいと思っていた。非国民というレッテルを貼られることはとてもつらいことだった。

Q 学徒動員で硫安は何のために作っていたのか？

A 肥料のために作っていた。

Q 当時の大人は？

A 国民服を着、女性はモンペをはいていた。贅沢は敵だと教え込まれ、異色な人間はタブーだとされていた。